

## 研究・調査報告書

分類番号		報告書番号	担当
A-139	A-136	14-038	滋賀医科大学社会医学講座公衆衛生学部門
<b>題名 (原題/訳)</b>			
Flushing response modifies the association of alcohol consumption with markers of glucose metabolism in Japanese men and women. 日本人男性及び女性において、フラッシング（潮紅）反応は飲酒の糖代謝マーカーとの関連性を修飾する			
<b>執筆者</b>			
Kuwahara K, Kochi T, Nanri A, Tsuruoka H, Kurotani K, Pham NM, Akter S, Kabe I, Mizoue T.			
<b>掲載誌</b>			
Alcohol Clin Exp Res. 2014 Apr;38(4):1042-8. doi: 10.1111/acer.12323.			
<b>キーワード</b>			<b>PMID</b>
アルコール、フラッシング反応、HbA1c、インスリン抵抗性、インスリン分泌			24428824
<b>要 旨</b>			
<b>背景と目的：</b> 飲酒による糖代謝への影響はアルコールのフラッシング反応に依存する。本研究では、日本人男女における飲酒量と糖代謝マーカーとの関連に対するアルコールのフラッシング反応の影響を調査した。			
<b>方法：</b> 日本の製造会社の18～69歳の従業員979名（男性855名、女性94名）を対象とした。フラッシング反応と飲酒量は自己記入式質問票を用いて調査した。インスリン抵抗性指数(HOMA-IR)、インスリン分泌能指数(HOMA-B)を、空腹時の血漿血糖値及びインスリン値を用いて計算された。フラッシャー（フラッシング反応あり）群とノンフラッシャー（フラッシング反応なし）群で、多変量回帰分析を用いて、空腹時血漿血糖値、ヘモグロビンA1c及びHOMAの調整平均値を飲酒群毎に推定した。			
<b>結果：</b> フラッシャー群において飲酒量はヘモグロビンA1cレベルとU型の関連があり、最も低いHbA1cレベルは1日摂取エタノール量23.0～34.5gであった（2次トレンドP=0.002）。ノンフラッシャー群において、飲酒量はHbA1cレベルと線型の逆相関を示した（線型トレンドP=0.001）。中等量飲酒レベルでのHbA1cの低下はノンフラッシャー群に比べフラッシャー群でより明らかであった（相互作用P=0.049）。フラッシャー群とノンフラッシャー群のどちらでも、飲酒量が最も多い群で空腹時血糖値の増加との関連が見られた。フラッシャー群において飲酒量増加に伴い統計学的に有意なHOMA-IRの低下が見られたのに対して、ノンフラッシャー群では飲酒量増加に伴うHOMA-IRレベル低下はわずかなものであった。同様に、フラッシャー群とノンフラッシャー群のどちらでも、HOMA-Bは飲酒量増加に伴い低下した（トレンドP<0.001）。			
<b>結論：</b> 今回の結果は、健康な日本の成人において、フラッシング群での中等量の飲酒が糖代謝とインスリン抵抗性を改善させ可能性を示唆している。			